

神奈川大学21世紀 COEプログラムの ご挨拶

ご挨拶



学校法人 神奈川大学理事長

大野 泰

歴史民俗資料学研究科を中心とした研究プログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』が21世紀COEプログラムに採択されてから2年目を迎え、来年度に行われる中間評価に向けて精力的に調査・研究が進められていることは大変喜ばしく、拠点リーダーをはじめとするこのプログラムに携わる各位の活躍に深く敬意を表するものである。

最近の受験生が大学を選ぶ際「動いている大学」が基準の一つとなっているという話を聞いた。「動いている大学」というのは漠然としているが、具体的には社会や受験生のニーズに的確に対応した取り組みを展開している、元気の良い大学ということなのではないかということである。「動いている」元気の良い大学の中にいれば、自らも有意義な大学生活を送ることができるだろうと期待しての選択だとすれば、その「動き」は一つのことで足りるのではなく、大学生活の中で経験するであろう全てのことについて求めているのではないか。つまり、自らが4年間過ごすキャンパスの施設・設備や環境、仲間たちとの課外活動、そして、自分が専攻する授業の内容や研究の一端など、大学生活についての具体的なイメージを抱くことができる様々な情報が広く伝わっていくことが必要である。

神奈川大学における「研究の動き」を広く社会に伝えるという意味から、この『人類文化研究のための非文字資料の体系化』が果たす役割は非常に大きく、法人としても十分なバックアップが必要であると考えている。なぜなら、このCOEプログラムは文部科学省からの支援が終了した後も、世界最高水準の研究教育拠点として研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図ることが求められており、永続的に研究教育活動を進め、情報・成果を発信していくことが求められているからである。さらに、この研究テーマそのものが、永続的な研究教育活動によって成果を生み出すにふさわしいものであることも忘れてはならない。昔の絵に依って生活の様子や遊びの世界などが伝えられてきたように、現在も映像が我々の生活を伝えたり、学びの場で活用されたりしている。文字の世界と非文字の世界とが協調しながら文化を伝え、その結果さらに成熟していくことを想うと、この研究は、過去から現代までの永いつながりの中に光を当て、過去の文化を現在に生かすことができる意義深いものであることを確信する。

日本から発信する世界の拠点でありつづける大きな責任を負っているわけだが、教育・研究による社会貢献を求められている大学にとっては、成果を広くアピールすることができる、またとない機会を与えられているということも言えるだろう。この研究が大きな成果をあげ、今後の神奈川大学にとってかけがえのない財産となることを期待している。